

福祉系大学生の援助規範意識が 向社会的行動に与える影響

○東京未来大学
立正大学

野澤義隆(7496)
仲山佳秀(5609)



Keywords; 援助規範意識, 向社会的行動, 共感性.

研究の背景と目的

- 「福祉の人＝優しい」や「親切」などのイメージを持たれることがある。福祉を志す学生も同様である一方、その領域に興味関心をもつ者特有の行動や思考の傾向があると考えられる。
- 親切行動や援助行動のことを、向社会的行動という(菊池, 1988)。実際に困っている人がいた場合、向社会的行動を行える人とは、どのような援助に対する規範意識を持つのだろうか。
- 困っている人がいるという気づきから行動に移るまでには様々な要因が存在する(菊池, 1988)。その要因とは、社会的変数や状況的変数、文化的変数などが存在し、共感性などを媒介して行動に至る(e.g. Bar-Tal, 1976)。しかし、このような向社会的行動に至るには、Bar-Tal(1976)が挙げる要因の他、援助者がもつ援助の規範意識などの個人的要因があると考えられる。
- 以上のことから本研究は、福祉系大学生の援助規範意識が共感性を媒介して向社会的行動に与える影響を検討する。

方法と倫理的配慮

● 調査の概要

- 2016年6月に、質問項目の内容妥当性を検討するため、プレテストを実施した。プレテストは、5名の大学生を対象にした。その後、プレテスト対象者にヒアリングを行った。結果、向社会的行動尺度の「気持ちの落ち込んだ友人にデンワしたり、手紙を出したりする」の項目において、現代では友人との連絡方法は、メールやLINEが主流であるため手紙に限定されないとの意見が出された。その後、研究者2名で文言を検討し、最終的に「気持ちの落ち込んだ友人にメールやデンワ、手紙などで連絡を入れる」に修正した。本研究では、上記項目を使用することとした。
- その後、本調査を実施した。調査は、2016年6月～7月にかけて、首都圏内の大学生を対象に自記式の質問紙調査を実施した。計351件を回収し、データの欠損が多い3件を除いた348件をデータセットに含めた。

● 倫理的配慮

- 調査の際は、一般社団法人日本社会福祉学会の研究倫理指針を厳守した。本調査は、被験者に対して研究の目的、調査は無記名で実施すること、回答しにくい項目は回答しなくてもよいこと、結果はすべて統計的に処理するため、個人の名前や回答が公表されることはないこと、回答は研究以外の目的で使用しない旨を口頭ならびに文書で伝え、同意を得られた方に調査を実施した。

方法(尺度と分析)

• 使用尺度

- 援助規範意識: 援助規範意識尺度(箱井・高木, 1987)を用いた。返済規範意識(9項目), 自己犠牲規範意識(8項目), 交換規範意識(5項目), 弱者救済規範意識(7項目)の4因子で構成。「1. 非常に反対する」~「5. 非常に賛成する」の5件法で回答を求め, 尺度得点の平均値を用いた。
- 向社会的行動: 向社会的行動尺度(菊池, 1988)を用いた。「向社会的行動(20項目)」の1因子で構成。「1. したことがない」~「5. いつもした」の5件法で回答を求め, 尺度得点の平均値を用いた。
- 共感性: 多次元共感性尺度(鈴木・木野, 2008)を用いた。被影響性(5項目), 他者指向的反応(5項目), 想像性(5項目), 視点取得(5項目), 自己指向的反応(5項目)の5因子で構成。「1. 全くあてはまらない」~「5. 非常によくあてはまる」の5件法で回答を求め, 尺度得点の平均値を用いた。
- なお, 逆転項目は点数を修正した。

• 分析

- 本研究では, 援助規範意識が共感性を媒介して向社会的行動に影響を与えるモデルを想定した。なお, 本研究の分析には, Mplus(Muthén&Muthén, 1998—2012)のVersion.7.3を用いた。

分析結果

- 以下のモデルについて、構造方程式モデリングによる分析をロバスト最尤推定法によりおこなった。結果、モデルは識別され、かつモデルの適合度は良いと判断した。

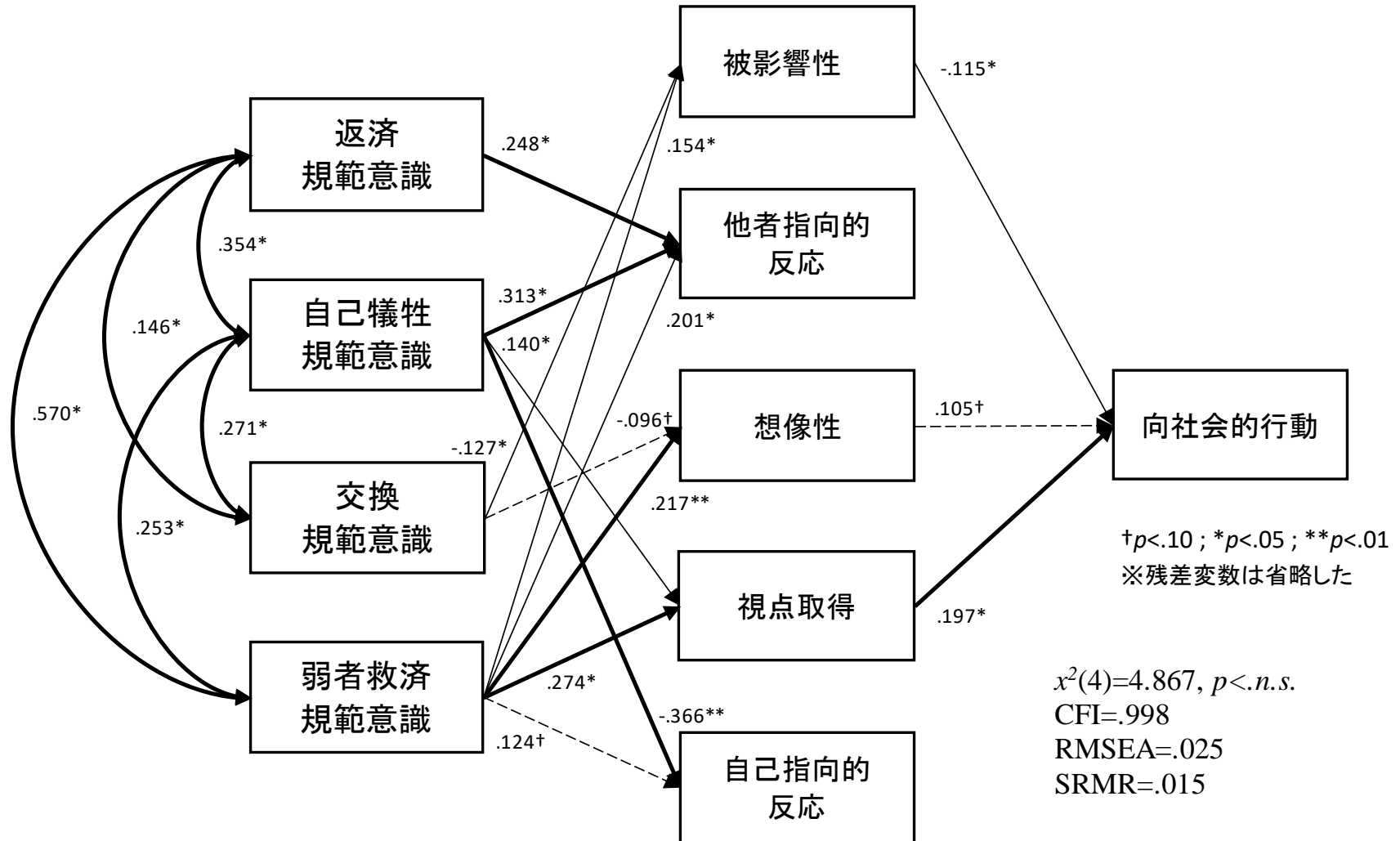


Figure 1 モデルの推定結果 (標準化解, 有意なパスのみ表示)

分析結果の詳細

Table 1 各尺度得点の記述統計量(ロバスト最尤推定法による推定値)

	平均	分散		平均	分散
返済規範意識	3.503	0.233	被影響性	3.166	0.679
自己犠牲規範意識	3.305	0.260	他者指向的反応	3.698	0.409
交換規範意識	3.100	0.202	想像性	3.514	0.562
弱者救済規範意識	3.562	0.219	視点取得	3.639	0.388
向社会的行動	2.882	0.465	自己指向的反応	3.511	0.423

Table 2 モデルの推定値(標準化解)

	推定値	標準誤差	ρ		推定値	標準誤差	ρ
返済規範意識 → 被影響性	0.094	0.084	0.266	交換規範意識 → 視点取得	0.027	0.053	0.606
返済規範意識 → 他者指向的反応	0.248	0.060	0.000	交換規範意識 → 自己指向的反応	-0.024	0.052	0.651
返済規範意識 → 想像性	0.065	0.069	0.346	弱者救済規範意識 → 被影響性	0.154	0.061	0.011
返済規範意識 → 視点取得	0.029	0.072	0.685	弱者救済規範意識 → 他者指向的反応	0.201	0.077	0.009
返済規範意識 → 自己指向的反応	0.079	0.070	0.257	弱者救済規範意識 → 想像性	0.217	0.065	0.001
自己犠牲規範意識 → 被影響性	-0.037	0.066	0.572	弱者救済規範意識 → 視点取得	0.274	0.069	0.000
自己犠牲規範意識 → 他者指向的反応	0.313	0.048	0.000	弱者救済規範意識 → 自己指向的反応	0.124	0.064	0.055
自己犠牲規範意識 → 想像性	0.034	0.058	0.557	被影響性 → 向社会的行動	-0.115	0.053	0.030
自己犠牲規範意識 → 視点取得	0.140	0.066	0.032	他者指向的反応 → 向社会的行動	0.090	0.063	0.154
自己犠牲規範意識 → 自己指向的反応	-0.366	0.055	0.000	想像性 → 向社会的行動	0.105	0.063	0.098
交換規範意識 → 被影響性	-0.127	0.055	0.020	視点取得 → 向社会的行動	0.197	0.060	0.001
交換規範意識 → 他者指向的反応	-0.023	0.047	0.628	自己指向的反応 → 向社会的行動	0.000	0.066	0.999
交換規範意識 → 想像性	-0.096	0.055	0.083				

考察

- 想像性や視点取得は向社会的行動に正の有意な影響を与えていた。一方、被影響性は向社会的行動に負の有意な影響を与えていた。つまり、自己を架空の人物に投影させる認知傾向や、相手の立場からその他者を理解しようとする認知傾向が高まることで、援助行動や親切行動などの社会的に望ましい行動が増加するものの、他者の感情や意見に影響されやすくなるほど、社会的に望ましい行動が減少することが示唆された。
- 被影響性と想像性に対して、交換規範意識は有意な負の影響、弱者救済規範意識は有意な正の影響を与えていた。つまり、援助に見返りを期待し、自分に有利になるような援助なら行うべきという意識が低くなるほど、自己を架空の人物に投影させる認知傾向が高まるとともに他者の感情や意見に影響されやすくなる。一方で、自分よりも弱い立場、悪い立場、経済的に困っている人々に対する救済意識が高まるほど、自己を架空の人物に投影させる認知傾向が高まるとともに他者の感情や意見に影響されやすくなることが示唆された。

考察と今後の課題

- 視点取得に対して、自己犠牲規範意識と弱者救済規範意識は有意な正の影響を与えていた。つまり、自己犠牲を含む愛他的行動意識や自分よりも弱い立場、悪い立場、経済的に困っている人々に対する救済意識が高まるほど、相手の立場からその他者を理解しようとする認知傾向が高まることが示唆された。
- 総じて、福祉系大学生は、弱者救済規範意識の高まりが被影響性や想像性、視点取得を媒介して向社会的行動に影響を与える。一方で、交換規範意識が低まると被影響性や想像性を媒介して向社会的行動に影響を与える。つまり、困っている人への救済意識は相手の立場に立ってみたり理解しようとすることにつながり、そのことが社会的に望ましい行動につながるが、見返りを求めるような規範意識は、結果として社会的に望ましい行動にはつながらなくなると言える。
- 援助規範意識が大学での学びから得られたものなのか、あるいは既に規範意識をもち入学しているのかは不明である。このような援助規範意識がどのように形成されていくのかは今後の課題である。



引用文献

Bar-Tal, D. (1976). Prosocial behavior – theory and research. New York: John Wiley & Sons.

箱井英寿・高木修(1987) 援助規範意識の性別、年代、および、世代間との比較. 社会心理学研究, 3(1), 39-47.

菊池章夫(1988) 思いやりを科学する— 一向社会的行動の心理とスキル—. 川島書店.

Muthén, L.K. and Muthén, B.O. (1998–2012). Mplus User's Guide. Seventh Edition. Los Angeles, CA: Muthén&Muthén.

鈴木有美・木野和代(2008) 多次元共感性尺度(MES)の作成— 自己指向・他者指向の弁別に焦点を当てて—. 教育心理学研究, 56, 487-497.

ご清聴ありがとうございました。

